川端康成全集　第十卷

川端康成全集

第十卷

名　人

新潮社

川端康成全集第十卷

名人

昭和四十四年七月二十五日　發行
昭和四十八年九月　三十日　三刷

定價　千七百圓

著者　川端康成
發行者　佐藤亮一
印刷者　塚田重
印刷所　塚田印刷株式會社
原色版　半七寫眞工業株式會社
製本所　新宿・加藤製本所
東京都新宿區矢來町七一
發行所　株式會社　新潮社
電話東京(〇三)二六〇—一一一一
〒一六二　振替東京八〇八番

亂丁本、落丁本は本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

© Yasunari Kawabata Printed in Japan 1969

第十卷　目次

名人……七
日も月も……一二七
自然……三〇七
無言……三二五
明月……三四一

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

水月……三四九
小春日……三六三
横町……三七七
離合……三九九

名

人

名

人

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

一

第二十一世本因坊秀哉名人は、昭和十五年一月十八日朝、熱海のうろこ屋旅館で死んだ。數へ年六十七であつた。

この一月十八日の命日は、熱海では覺えやすい。「金色夜叉」の熱海海岸の場、貫一のあのせりふの「今月今夜の月」の日を記念して、一月十七日を熱海では紅葉祭といふ。秀哉名人の命日は、その紅葉祭の翌日にあたる。

紅葉祭には、例年、文學的な行事があるが、名人の死んだ昭和十五年の紅葉祭は、最も盛大に催された。尾崎紅葉のほかに、熱海に縁の深かつた高山樗牛と坪内逍遙も加へて、三人の物故文人を慰靈し、また前年度の作品に熱海を紹介した、竹田敏彦、大佛次郎、林房雄の三人の小說家に、市の感謝狀が贈られた。私も熱海に滯在してゐたので、この祭に出席した。

十七日の夜、市長の招宴は、私の宿の聚樂にあつた。そして、十八日の明け方、名人が死んだといふ電話で、私は起されたのだつた。私は直ぐうろこ屋に行つて名人を拜み、いつたん宿へ歸つて朝飯をすませてから、紅葉祭に來てゐる作家や市の世話人とともに、逍遙の墓に參つて花を供へ、梅園へまはつたが、その撫松庵での宴會半ばから、またうろこ屋に行つて、名人の死顏の寫眞をうつし、やがて遺骸が東京に歸るのを見送つた。

名人は熱海へ一月の十五日に來て、十八日に死んだ。まるで死にに來たかのやうであつた。私は十

六日に名人を宿へたづねて將棋を二局指した。そして夕方、私が歸ると間もなく、名人は急に惡くなつた。名人の好きな將棋も、私と指したのが最後であつた。私は秀哉名人の最後の勝負碁（引退碁）の觀戰記を書き、名人の最後の將棋の相手をし、名人の最後の顔（死顔）の寫眞をうつしたわけであつた。

名人と私との緣は、東京日日（毎日）新聞社が引退碁の觀戰記者に、私を選んでくれたことから始まる。新聞社の催しの碁としても、この碁は空前絕後に大がかりであつた。六月二十六日に芝公園の紅葉館で打ち始め、伊東の暖香園で打ち終つたのは十二月四日であつた。一局の碁にほぼ半年を費した。十四回も打ち繼いだ。私は新聞に觀戰記を六十四回にわたつて連載した。もつとも、局半ばで名人が病ひで倒れたために、八月の中ごろから十一月の中ごろまで、三月は休んだ。しかし名人の重い病ひのために、この碁はなほ悲痛なものとなつた。そしてやはりこの碁が名人の命取りとなつたのだらう。この碁の後、名人はもとの體にもどれないで、一年ほど後に死んだのであつた。

二

この名人の引退碁の終つた時間を正確に言ふと、昭和十三年十二月四日午後二時四十二分であつた。黑の二百三十七が手止りであつた。

そして、名人が無言のまま駄目を一つつめた瞬間に、

「五目でございますか。」と、立ち合ひの小野田六段が言つた。つつしみ深い聲であつた。名人の五目負けと分つてゐるものを、ここで作つてみる、その勞を省かうとした、名人への思ひやりであらう。

「ええ、五目……。」と、名人はつぶやいて、はれぼつたい瞼を上げると、もう石をならべてみようと

はしなかつた。

對局室につめかけてゐる世話役の誰一人として、ものが言へない。その重い空氣をやはらげるやうに、名人が靜かに言つた。

「私が入院しなければ、八月中に、箱根ですんでゐた。」

そして、自分の消費時間をたづねた。

「白は十九時間と五十七分、……後三分で、ちやうど半分です。」と、記錄係りの少年棋士が答へた。

「黑は三十四時間と十九分……。」

碁の持ち時間は、高段者でたいてい十時間見當であるのに、この碁に限つて、四十時間といふ、約四倍に延長されたのだつた。それにしても、黑の三十四時間は、大層な消費時間であつた。碁に時間制が出來てからでは、空前絕後であらう。

終つたのがちやうど三時近くなので、宿の女中がおやつを持つて來た。人々はやはり默つたまま、盤面に目をやつてゐた。

「どうですか、お汁粉？」と、名人が相手の大竹七段に言つた。

若い七段は打ち終へた時に、

「先生、ありがたうございました。」と、名人に禮をしたまま、深くうなだれてゐて、身動きもしないのだつた。兩手をきちんと膝にそろへて、白い顏は靑ざめてゐた。

名人が盤上の石を崩すのに誘はれて、七段も黑石を碁笥（ごけ）に入れた。名人は對局者の感想らしいものはひとことも言はないで、いつもと同じやうになにげなく立つて行つた。無論七段も感想はもらさなかつた。七段が負けたのであつたら、なにか言つただらう。

私も自分の部屋にもどつて、ふと外を見ると、大竹七段が、まつたくあつといふ間の早業で、どて

らに着替へて、庭に出て、向うのベンチにひとり腰かけてゐた。固く腕組みしてゐた。青い顔を伏せてゐた。冬曇りの夕近く、さむざむと廣い庭で、思ひに沈んでゐる姿だつた。

私が縁側のガラス戸をあけて、

「大竹さん、大竹さん。」と呼んでも、怒つたやうにちらつと振り向くだけだつた。涙が出てゐるのだらう。

私は目をそらせて、奥にひつこむと、名人の夫人があいさつに來た。

「長いあひだ、いろいろお世話になりまして……。」

私が夫人と二言三言話してゐる間に、大竹七段の姿は庭から消えた。そしてまた早業で、紋服に威儀を正すと、夫婦づれで、名人の部屋や世話人たちの部屋へ、あいさつに廻つた。私の部屋にも來た。

私も名人の部屋へあいさつに行つた。

三

半年がかりの碁も勝負がつくと、その次の日には、世話人たちもみなあわただしく歸つて行つた。ちやうど伊東線の試運轉の前日だつた。

年末年始の溫泉の書き入れ時をひかへて、電車が開通する伊東の町は、大通りに祝賀の飾りつけをして、景氣づいてゐた。いはゆる「罐詰め」にされた棋士とともに、私も宿屋に籠つてゐたので、歸りのバスに乘る時、この町の飾りが目につくと、洞窟を出たやうな解放を感じた。新しい驛のあたりには、土の色のなまな道路がひらけたり、急ごしらへの家屋が建ちかかつたりしてゐる、その新開地

の亂雜さも、私には世間の活氣と見えた。

バスが伊東の町を出てから、海岸の道で、柴を背負つた女たちに出會つたが、手に裏白を持つてゐた。柴に裏白を結びつけてゐる女もあつた。私は急に人なつかしくなつた。山を越えて來て、人里の煙を見た時のやうだつた。言はば正月を迎へる支度などの、尋常な暮しのしきたりがなつかしいのだつた。私は異常な世界からのがれて來たやうだつた。女たちは薪を拾つて、夕飯に歸るのだらう。海は日のありどころが分らぬやうな鈍い光りで、急に暗くなつて來さうな冬の色だつた。

しかし、そのバスのなかでも、私はやはり名人を思ひ浮かべてゐた。老名人の感じが身にしみてゐるので、人なつかしさも感じたりするのかもしれなかつた。

碁の世話人たちも一人殘らず引きあげて行つた後、老名人夫妻だけが伊東の宿に取り殘されてゐるのだ。

「不敗の名人」が、一生の最後の勝負碁に負けたのだから、その對局場に一番ゐたくないのは名人のはずだし、病氣を押して戰つた疲れを休めるにしても、それならなほ早く場所を變へたらよささうなものだが、さういふことに名人はぼんやりと無神經なのだらうか。世話人や觀戰の私までが、ここにはもうゐたたまれなくて、逃げ出すやうに歸つて行つたのに、負けた名人だけが取り殘される、その鬱陶しさ、味氣なさなどは、人の想像するにまかせて、自分では分らぬやうな顏で、名人はいつもと變りなく、ぽそつと坐つてゐるのだらうか。

相手の大竹七段はいち早く歸つて行つた。子供もない名人とちがつて、この人には賑かな家庭があつた。

家族が總勢十六人になつたといふ手紙を、大竹七段の夫人から私がもらつたのは、この碁の二三年後だつたと思ふ。十六人といふ大家族にも、七段の性格、もしくは生活の流儀が感じられて、私は訪

問してみたくなつた。その後、七段の父が死んで、十六人が十五人になつたのを、私はくやみに行つたことがあつた。くやみと言つても、葬式から一月も後だつたらう。私は初めての訪問だつたし、七段は留守だつたが、夫人がなつかしさうにしてくれるので、應接間に通つた。夫人はあいさつをすませると、扉のところまで立つて行つて、

「さあ、みんな呼んでらつしやい。」と、誰かに言つた。ばたばた足音がして、少年が四五人應接間へはいつて來た。子供の氣をつけのやうな姿勢で、一列にならんだ。みな内弟子らしく、十一二から二十くらゐまでの少年だつたが、なかに一人、頬の赤い、まるまると大柄の少女もまざつてゐた。

夫人は私を紹介して、

「先生に、ごあいさつなさい。」と言つた。弟子たちはぴよこんとおじぎをした。私は溫かい家を感じた。わざとらしさはなく、かういふことが自然に行はれる家だつた。少年たちはすぐ應接間を出てゆくと、廣い家を飛びまはつて騷ぐ音が私に聞えた。私は夫人にすすめられるままに二階へあがつて、内弟子に一局稽古をしてもらつた。夫人が食べものを次ぎ次ぎに出してくれて、私は長居になつた。

家族十六人といふのは、この内弟子たちも含めてのことだつた。内弟子を四五人も抱へてゐるのは、若い棋士ではこの人のほかになかつた。それだけの人氣と收入とがあるわけだが、また大竹七段の子煩惱で家族思ひの性質が、そこまでひろがつてゐるのであらう。

名人の引退碁の相手として、宿屋に罐詰めされてゐたあひだも、對局のあつた日は、夕方打ち掛けになつて自分の部屋へ引き取ると、いつも早速夫人に電話をかけた。

「今日は、先生にお願ひしましてね、(何) 手まで進みました。」

それだけの報告で、碁の形勢を匂はすやうな不謹愼のあらうはずはなかつたが、この電話の聲が七段の部屋から聞えて來ると、私は好意を持たずにはゐられなかつた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com